平成２９年度　研究のまとめ

研究主題：こころも体もたくましい幼児の育成
～幼児が夢中になって体を動かして遊ぶための指導の工夫～

## １　研究主題設定の理由（学校の課題とのつながり）

本園の課題として、以下の 4 点が挙げられた。

・自分から運動遊びに参加しなかったり、体を動かすことを好まなかったりする幼児がいる。

・東京学芸大学教育学部准教授吉田伊津美編著『幼児の運動遊び』にある 46 の基本動作の中で、3 年間で経験できる動きに偏りがありそうである。

・平成 28 年度併設小学校第 1 学年のスポーツテストにて、全国、都平均を下回る項目がある。
（20mシャトルラン、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、上体起こし）

・新園舎における屋上園庭、遊戯室等の場を効果的に使うことができていない。

これらの課題解決を図るため、遊びの中で多様な動きを経験できるようにすることを意識しつつ、幼児が夢中になって体を動かして遊ぶための環境、時間を工夫することで、心も体もたくましい幼児の育成につながると考え、主題設定をした。

## ２　研究の内容と方法

・夢中になって体を動かして遊ぶ幼児の姿を捉える視点を学年毎に共通理解する。それをもとに事例を作成・検討し、指導の工夫を探る。

・音楽に合わせて体を動かす有酸素運動遊びのインストラクターによる幼児向けのレッスンを実施し、幼児が体を動かす楽しさ心地よさを実感できる機会を設定する。また、有酸素運動遊びを日常の好きな遊びに取り入れ、幼児が主体的に体を動かして遊べる環境・場・時間を設定する。

・運動を専門に研究をしている大学教員を講師に招き、園内研究会で、園にある遊具や用具、音楽の効果的な使い方を学び、指導に生かす。

・「46 の基本動作」の表を使い、遊びの中で見られた動きをその都度確認していくとともに、学期に一度、その動きが園内のどの場所で、どの遊びの中で見られたか環境図を用いて確認することで、経験した動きを可視化・明確化し、多様な動きを経験できるようにする。

・5 歳児が 1 学期と 3 学期にソフトボール投げと 25m 走を測定し、数値の変化を分析・考察する。

## ３　研究の成果

・学期に一度、幼児が夢中になって体を動かして遊ぶ幼児の姿を捉えた事例の検討をしてきたことで、17 の実践事例を検討し、指導の工夫を学ぶことができた。

・有酸素運動遊びの要素を取り入れつつ、幼児が夢中になって体を動かして遊べるよう指導の工夫を意識してきたことで、環境や時間を工夫し、限られた時間の中で、全員が一定の運動量を確保し、運動意欲を高める取り組みを展開することができた。

・記録した「46 の基本動作」の表を分析したところ、3 年間で 42 種類の動きを経験できることが分かった。3 年間で一度も経験できない動きは「支える」「おぶう」「踏む」「逆立ち」であった。経験した動きの種類に焦点を当てたことで、幼児に経験させたい必要な動きを意識して指導にあたることができた。

・ソフトボール投げでは、平均飛距離が 1.1m伸びており、25m走では、平均タイムが 0.4 秒縮まっていることが分かり、学年全体で体力の向上が図られた。

・4 歳児の取り組み「1 曲マラソン」実施前後で、運動遊びに取り組む幼児の人数の変化を分析したところ、実施前に比べて 11 人増加し、自分から体を動かして遊ぶ幼児を増やすことができた。

・幼児が夢中になって体を動かし、様々な動きを経験できるように指導を工夫していくことで、幼児の持つ一つ一つの力を伸ばし、総合的に体力の向上を図っていく大切を再認識できた。

## ４　今後の課題

・様々な動きの種類が見られていた一方で、回数で考えると 3 年間通しても数回しか見られていないような動きもあった。

・場の使い方が不十分であり、もう一工夫できることが多くあると感じた。

・3 学年が同じ場で遊べる校庭の活用が不十分であり、学年間の幼児同士の関わりが少なかった。

・4 歳児で取り組んだ「1 曲マラソン」を、学年の発達に応じて全学年で行えるとよかった。